

正岡子規と小杉天外に関するノート

―天外が伝える子規の新出句のことなど―

復 本 一 郎

一 『子規全集』 内容見本中の天外の文章

アルス版『子規全集』の大正十五年(一九二六)七月よりの刊行を知らせる内容見本の巻末に「子規に対する諸家の感想」と題するページが設けられている。全二十一ページ。諸家が子規とのかかわりをテーマに、短文を寄せている。諸家とは、佐藤春夫を筆頭に、芥川龍之介、相馬御風、古泉千樫、寺田寅彦、土岐善麿、齋藤茂吉、長谷川如是閑、室生犀星、三宅やす子、平田禿木、平福百穂、吉植庄亮、土井晩翠、与謝野寛、中村吉蔵、島田青峰、土田杏村、川路柳虹、加藤武雄、内田魯庵、岡村龍彦、松本丞治、中川一政、入澤達吉、河井醉茗、杉村楚人冠、笹川臨風、萩原朔太郎、小杉天外、新居格、高須芳次郎、井澤弘、岡本かの子、小川劍三郎、林若樹、野上豊一郎、野上弥生子の三十八名。中で、今、私が注目しようとしているのは、小杉天外の「正岡子規と私」と題する一文。さほど長い文章ではないので、まずは、左に全文を引用してみる。改行は無視して引用する。

私の家では祖父が俳諧をやつてゐたので、そんな関係からか俳句が非常に好きであつた。それで俳句には若い頃から注意し、正岡さんの新運動には殊の外注意してゐた。その頃正岡さんがやつてをられた日本新聞も常に読んでゐたし、また、自分の俳句や小説を度々見て貰つたこともある。慥か明治二十七年だつたと思ふ、正岡さんは自分の新聞に私の処女短篇小説「どろく姫」を推薦してくれたりして私を可愛がつてくれる、私も氏を慕つてゐたやうな仲で、谷中の三崎町にゐた時代などは、わざ／＼私の家まで訪ねて来てくれたりした。矢張り谷中の鶯横町にゐた頃は、私は二軒長屋の東の方に居り、正岡さんは同じ長屋の西の方にゐたといふやうな関係であつた。その頃私は俳句をやれと切りし、奨められ、その内容としては人情に基いた句を作れと言はれたものである。それで、私が病を得て小田原へ行つてゐた頃はよく俳句を作つたものである。興津に居つた頃

わざく／＼見舞に來たりなどして、その都度私に句を賜られた。

春風に吹かれて君は興津まで

病む人の病む人を訪ふ小春かな

こんな句は、その時々私のために詠まれた句である。そんな関係だったので、正岡さんの著書の殆んど総べてを持つてゐたが、全集となると私がこれまでに持つてゐる以外のものも這入つゝゐやあしなないかといふ考へもあつて矢張り纏めて揃へたい気がして来る。私は正岡さんの和歌が一番好きであつて、私が家庭で自分の子供に和歌を教へたといふのも、つまりは正岡さんのものに感服した結果であつて、子供はその和歌に依つて何れだけ育てられたか、導かれたか知れない。兎に角、今全集が出るといふことは嬉しい氣がします。

正岡子規の視点からも、小杉天外の視点からも、そして両者の交流の視点からも、内容の濃い文章である。この文章を綴つてゐる天外、慶応元年（一八六五）に生まれて、昭和二十七年（一九五二）に没している。享年、数え年八十八。子規が慶応三年（一八六七）の生まれであるので、子規より二歳年長ということになる。秋田県生まれ。斎藤緑雨門。

そこで、天外の文章に注目してみることにする。天外

の生家は「農を業とし兼ねて醬油醸造絞油呉服太物商等を営んでゐた（松本龍之助著『明治大正文学美術人名辞書』立川書店、大正十五年四月刊、参照）ようである。そんな中で、祖父が俳諧に親しんでいたと記している。その影響で、天外自身も若い頃から俳諧に関心があつたやうであり、子規という存在も、「新運動」も自ずから視野の中に入つてゐたと述べている。子規の動向は、新聞「日本」を通して把握してゐたようである（正岡さんがやつてをられた日本新聞も常に読んでゐた）。天外、明治十六年（一八八三）、数え年十九歳の折に一度上京しているが、徴兵検査のため明治十八年（一八八五）に帰郷、そして明治二十二年（一八八九）、再び上京、ということであつたようである（伊藤整編『小杉天外 小栗風葉 後藤宙外集』筑摩書房、昭和四十三年十月刊、所収の大塚豊子編「年譜 小杉天外」参照）。子規と天外との交流は、明治二十二年（一八八九）以降ということになる。今日、子規の天外宛書簡は、全四通残つてゐる。それぞれ、明治二十八年（一八九五）一月一日付、同七月二十三日付、明治二十九年（一八九六）九月九日付、明治三十年（一八九七）十二月十一日付である。いずれも、その内容において、小稿とは当面、直接かかわらない。対する天外の子規宛書簡は、二通残つてゐる。一つは、明治二十九年（一八九六）八月十七日付、もう一つは、同年九月十四日

付である。この中で、前者の書簡が、小稿とかかわつてすこぶる興味深い一節を含んでいる。この時、子規の住所は、東京市下谷区上根岸町八十二番、差出し人である天外の方は、羽後国仙北郡六郷町となつてゐる。この住所は、天外の故郷の実家の住所である。先の大塚豊子氏の年譜では明らかにされてゐないが、明治二十九年（一八九六）六月十五日の三陸大地震による一時帰郷ということであつたのであろう（同年九月九日付の天外宛子規書簡には「先日八御地大地震にて六郷全潰との報に接し、先づ肝潰れ候へども、全潰とありて八氣遣ひも気づかひなれど、手紙出した処でどんなものかとわざとひかえ候」との文言が見える）。

天外は、まず、子規の病状を案じて左のように記している。

小生等を以て見れば、十分に御治療なされ候とも申されず候。其処には種々と事情もあるべく、又厳たる御観念（筆者注・考へ）も有之べく候へども、今一入こゝに意を用ゐる玉はゞ、歩行の自由なる位に至るは容易の儀と存ぜられ候。（中略）知慧といふもの無き小生なれば辱知の恩に酬ふべきの術も知らず候。只一日にても此の世に長くゐまし玉ふを望む念のみ切に候へば、誰よりも五月蠅すゝめ上候ひしならん言葉なれども、猶御治療に力を致されんこと希望に

たへず候。

先にも述べたように、天外、子規より二歳年長ではあるが、後に述べるがこときいきさつもあり、心底より「辱知の恩」を感じていたようである。それが、執拗なまでに子規に「治療」を勧める結果になつてゐるのであろう。子規に対する「只一日にても此の世に長くゐまし玉ふを望む念」の吐露は、あまりに直截で、その大胆さにびつくりさせられるが、それだけ子規を思う気持ちが強かつたということであろう。この書簡を受け取つた子規も、決して不快な思ひはしなかつた筈である。——ということで、私が大いに注目した一節を見てみる。左のように記されている。

俳句に就きての御教訓毎度ながら、小生如き俗骨を御見かぎり無く丁寧にお示し被下、千万難有存候。近ごろは暑氣の為かして心地よからず、駄句も出すべき氣力無之相成申候。過日、日食のをり、

日蝕やかつたい窓をのぞきけり

未だ俳味といふことも分ならず候へば、句になることやら、ならぬことやら、夢中にて候。

大変面白い。先に全文引用した「正岡子規と私」の一文と重ね合わせると、俳句という文芸を中にしての子規と天外の関係が浮び上つてくる。ただし、今日にあつては、その真相を解決し得ない事項もある。最も面白いの

は、子規と天外が隣同士だったという記述である。天外は、左のように記している。

谷中の鶯横町にゐた頃は、私は二軒長屋の東の方に居り、正岡さんは同じ長屋の西の方にゐたといふやうな関係であつた。

ところが、これがはつきりしないのである。この文章を書いているのが、仮に大正十五年（一九二六、この年十二月二十五日に昭和と改元）とすると、子規が没して（子規は、明治三十五年九月十九日没）、すでに二十四年が経過している。天外（大正十五年の時点で、六十二歳）の記憶が、やや混乱している、ということも十分に考えられる。子規が、恩人、日本新聞社社長陸羯南家の西隣、上根岸八十八番地より、東隣の上根岸八十二番地に転居したのは、明治二十七年（一八九四）二月一日のこと。子規門の寒川鼠骨は、その著『正岡子規の世界』（青蛙房、昭和三十一年十月刊）の中で、

八十二番地への移転は、廿七年の一月に子規居士を編輯長として新聞「小日本」を創刊する議が決し、俸給も三十円に増額された為に、やゝ高い家賃を奮発し、羯南先生の東隣りに空家が出来たのを幸ひとして断行されたのであつた。

と述べ、「市町名は上根岸八十二番地であるが、通称は鶯横町であつた。（中略）近く上野へ登る溪徑に鶯溪の名

があつたやうに、此の横町も樹々の茂りに鳴き移る鶯が多かつたため名づけられたのである」としている。「鶯横町」は、上根岸八十二番地界限の通称だったのである。が、子規の住居は、一戸建（河東碧梧桐著『子規の回想』昭南書房、昭和十九年六月刊、の中に、このいわゆる子規庵の看取図が示されている）。どうも天外の記憶違いのようである。が、ごく近隣に住んでいたことは間違いないであらう。

天外は続ける。

その頃私は俳句をやれと切りに奨められ、その内容としては人情に基いた句を作れと言はれたものである。

この記述も大変興味深い。明治二十七年（一八九四）といえば、子規が洋画家中村不折と巡り合い、「写生」の理論を確立した年である。そのような状況下で「人情に基いた句を作れ」と言われたのである。もし、この天外の記述が信憑性のあるものだとしたら、子規の真意がどこにあつたのか、ということは、大いに吟味しなければなるまい。——ただし、これらの記述はなにしろ、天外の三十数年前の記憶に基いてのものであるので、いささか心もとない点もある。対して、書簡のほうは、なにしろ、子規生前に子規に宛たものであるだけに信憑性を問題にする必要は、まったくくない。

子規が天外に対して熱心に俳句の指導をしていたことは、間違いないようである。子規に対しての「俳句に就きての御教訓毎度ながら、小生如き俗骨を御見かぎり無く丁寧にお示し被下、千万難有存候」との文言に、それを窺うことができる。このような指導を受けていた天外であれば、天外の伝える子規の言葉「人情に基いた句を作れ」も、あながち否定し得ないように思われる。

そんな指導の下に、天外が子規に披瀝した作品が、日蝕やかツたい窓をのぞきけり

であった。この句を見ると、子規が「人情に基いた句を作れ」との言葉に込めた真意が窺知し得るようにも思われてくる。子規は、明治三十年（一八九八）、新聞「日本」に長篇評論「明治二十九年の俳諧」（後に、表題を「明治二十九年の俳句界」に改めている）を連載しているが、その明治三十年一月二十五日連載分において、俳句は元と簡單なる思想を現すべく、随つて天然を詠ずるに適せるを以て、元禄に在りて既に此傾向の甚だしきを見る。明和・安永に至り蕪村は別に一機

軸を出だし、俳句の趣向として天然を取ると共に人事をも取り、しかも其点に成功するを得たり。

と記している。明治二十九年（一八九六）、子規、およびその周辺の人々（特に虚子）は、蕪村を通して俳句における「人事」的側面に大いなる関心を示していたのであ

る。天外が伝えている子規の言葉「人情に基いた句を作れ」も、「人事」句とのかかわりにおいて見るならば、その意味するところ、自ずから明らかになつてくるように思われるが、いかがであろうか。

そこで天外の「日蝕やかツたい窓をのぞきけり」の句であるが、「かツたい」は、「かたい」、すなわち「乞丐」である。室生犀星が、後年（大正二年）、「ふるさと」を「うらぶれて異土の乞食となるとも 帰るところにあるまじや」（小景異情）と詠んだ、そこに出てくるころの「乞食」、「かツたい」である。「日蝕」という現象下、乞食が人家の窓を覗いているというのである。どこか侘しく、心淋しい光景である。まさしく子規言うところの「人事」の句であり、また「人情に基いた句」である。

子規から俳句の指導を受けた天外であるが、その作品となると、まったく言つていいほど知られていない。

天外俳句作品の収集は、今後の大きな研究課題であるが、そんな状況下、この「日蝕や」の作品、貴重である。他には『明治大正文学美術人名辞書』の「小杉天外」の項に、草の汁妹の腕に染めんと思ふ

の一句が紹介されている。この句、後代（大正六年）の萩原朔太郎の詩「愛憐」（月に吠える）所収）中の「女よ、このうす青い草のいんきで、まんべんなくお前の顔をいろどつて」の詩句、あるいは「おまへの美しい皮膚

の上に、青い草の葉の汁をぬりつけてやる」の詩句の先蹤をなすものであろう。すこぶる詩的な佳句。そして、この句また「人事」句であり、「人情に基いた句」である。天外は、子規の指導に素直に従いながら作句に励んでいたのであろう。天外俳句の全貌、大いに気になるところである。その天外が、「未だ俳味といふことも分らず候へば云々」と、「俳味」なる言葉を用いていることも注意してよいであらう。例えば、夏目漱石の『吾輩は猫である』（明治二十八年）の中に「上田敏君の説によると俳味とか滑稽とか云ふものは消極的で亡国の音ださうだが」との文言が見えるが、明治二十九年（一八九六）の天外の使用例、「俳味」なる言葉の比較的早い時期の使用例かもしれない。そして、子規、および子規グループでは、比較的早くから「俳味」なる言葉で俳句の要諦を語っていたのかもしれない。その影響下での天外の使用と考えるのが、自然であらう。

二 子規の句、二句

再び、アルス版『子規全集』の内容見本中の天外の「正岡子規と私」の文章に「戻る。そこに子規の句、二句が紹介されている。

春風に吹かれて君は興津まで

病む人の病む人を訪ふ小春かな

である。〈春風に〉の句、今日、もっとも充実している講談社版の『子規全集』には、未収録。子規の新出句、ということになるうか。〈病む人の〉の句は、『寒山落木』中に明治二十八年（一八九五）冬の句として、

病む人の病む人をとふ小春哉

の句形で見える、新聞、雑誌等での公表は、なかったようである。他に、明治二十八年（一八九五）三月から十二月末までの俳句作品を碧梧桐と虚子が筆録した『病餘漫吟』の中にも、

寄天外 病む人の病む人をとふ小春哉

と見える。となると、天外の「正岡子規と私」の記述の内容の信憑性は、俄然、大きくなってくる。天外は、左のごとく記していた。

私が病を得て小田原へ行つてゐた頃はよく俳句を作つたものである。興津に居つた頃わざわざ見舞いに來たりなどして、その都度私に句を賜られた。

春風に吹かれて君は興津まで

病む人の病む人を訪ふ小春かな

こんな句は、その時々私のために詠まれた句である。

この天外の言葉が、信憑性のあるものであることが、先の『病餘漫吟』中に見えた〈病む人の〉頭書「寄天外」によつて立証されたのである。だとしたら、

春風に吹かれて君は興津まで

の句も、子規の新出句として認定することに、もはや躊躇ためらいは不要であろう。先の大塚豊子編「年譜 小杉天外」によれば、明治二十七年（一八九四）の頃に、

この春、肺患を煩い、四、五月は修善寺や興津に遊び、健康の恢復を計った。

と見える。とすれば、子規の〈春風〉にの一句成立は、明治二十七年（一八九四）四月と見てよいであろうか。天外は、「正岡子規と私」の中に、

慥たか明治二十七年だつたと思ふ、正岡さんは自分の新聞に私の処女短篇小説「どろく姫」を推薦してくれたりして私を可愛がつてくれる。

と記していたが、子規が編集主任であつた「小日本」に、子規の推輓で天外の短篇小説「どろく姫」が、「撫浪漁史」の筆名の下、連載をスタートさせたのは、明治二十七年（一八九四）六月一日のことである。（天外が「辱知の恩」と記すところの実際である）。以降、六月十八日まで、全十四回の連載であつた。この作品、美術学校生みでの筆野伯爵令嬢艶子ひよしこを主人公とし、中村不折の存在が隠見するすこぶる面白い小説であるが、今は省略する。興津での「健康の恢復」が功を奏しての連載ということであつたのであろう。だとしたら、子規と天外との交流は「どろく姫」連載以前から、すでにはじまっていた、とい

うことなのであろう。しかし、なんとなくすつきりしない。これは、偏に小杉天外の側に詳細な年譜が備わつていないことによる。

が、今は、アルス版『子規全集』の内容見本の中に小杉天外の「正岡子規と私」なる小文を見出だし得たこと、そして、そこに子規の新出句を発見したことに満足しつつ、ノートとはいいいながらも、あまりにも蕪雑な小稿を閉じることにする。

※さらば我が育みし「麒麟」よ。いつまでも健やかであれかし。金谷良夫教授に、大切な「麒麟」を託します。よろしくお願いいたします。